『朱色優陽―アケイロユウヒ―』３

想隆　泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『朱色優陽―アケイロユウヒ―』３

【Ｎコード】
Ｎ９４７６Ｍ

【作者名】
想隆　泰気

【あらすじ】
小さな花壇を巡る騒動も収束し、起陽と逢花のココロにも平穏が訪れた。
新たに作られた小さな花壇の前では、様々な人々がささやかな癒しにココロを和ませる。
起陽と逢花、それに小さな遥花を交えた三人も、愛らしい花々を前に、笑顔の花を咲かせていた。

そんな三人の元へ、不意に現れる闖入者。
起陽へ親しげに語りかける少女。
面白くない逢花と、不安げな遥花。
そして、何故か表情を曇らせる起陽。

少女と起陽の関係は？　二人の過去に何があったのか？
波乱の予感と共に、夏の盛りが訪れる――

《臥待月の輝く夜は》

［1－1］

別に、それが嫌だった訳じゃない。ただ、実感が湧かなかった。
そいつがそうなのだと、写真を見せられてもピンと来なかった。
幾ら見直しても、そいつはただの見知らぬ女で、可愛いとか可愛くないとか、男なら当然湧いてくるはずの感慨も湧いては来なかった。
だから、他意など欠片ほどもなく、むしろどうでも良かった。
それでも素直に『彼ら』の願いを受け入れたのは、他でもなく、それが『彼ら』の片割れ、つまり――俺のお袋の、願いだったから。

立っているだけで汗がにじんでくるような、真夏の夜更け。梅雨もとっくに明けたというのに、外はバケツをひっくり返したような土砂降りだった。
傘も役に立たなければ、レインコートを着ることもできない。夜更けだというのに、蒸し風呂のような気温だったのだ。レインコートなど着て走り回ったら、あっと言う間に熱中症でぶっ倒れちまう。

……そう。あの日俺は、土砂降りの夜の街を、あっちこっち駆け回っていたんだ。
捜しモノがあったから。……探してくれと、頼まれたから。
僅かな情報を頼りに、俺は街中を駆け回って――そうして、ようやく見つけたんだ。
……顔を見ても、実感なんて湧いては来なかったけど。

――何故こんなことを思い出しているのか、自分でも不思議ではある。
……だがまあ、理由は多分、眼の前のこの子なんだろう。

色とりどりの花が咲く、小さな花壇の前。しゃがみ込む、麦わら帽子を被った小柄な背中が二つ。二人とも子供のように見えるが、一方は俺よりも年上だったりする。だが、もう一方は、正真正銘の女児だ。

「おにいちゃんおにいちゃん！」

そう言って、女児――遥花(はるか)は振り返った。

「……ん？　どした？」

「これ！　この白くてちっちゃいお花がいっぱいなの、すっごくキレイだねっ！」

軽く屈んで答えてやると、遥花は花壇を指さしながら、屈託なく笑った。

「ほう、なかなか趣味がいいな、ハルカ」

そう割り込んで来たのは、他でもない。すぐ隣にしゃがみ込む寸詰まり――逢花(おうか)である。

「これはカスミソウと言うのだ。『清い心』や『無邪気』さを象徴する花だな。……ふむ、ハルカに良く似合っているではないか。境(さか)守(がみ)もそう思うだろ？」

問われて、一も二もなく頷いた。否定する要素など一つもなかった。

「ああ……遥花は素直でいい子だからな。ぴったりじゃないか」

驚くほど素直に、そんな言葉が出てくる。正直、自分でも不思議だ。

不思議だが……悪い気はしない。

逢花も笑顔だったし、遥花はそれに輪をかけて笑顔だった。

「はるかいいこ？　いいこ？　……えへへへ～♪」

なんて、そんな風に笑う遥花を、心からいとおしいと思った。

「へ～、ホントに別人みたい。ってか、何か変な趣味に目覚めたん

じゃないでしょーね」
――幸福な時間を打ち破ったのは、そんな声だった。
ぎくりとして、瞬間、身が強ばった。……いや、強ばったのは表情もか。
「おにいちゃん……？」
「？　……知り合いか？　境守」
俺の様子がおかしなことに、二人は既に気づいている。怪訝な様子で俺の顔を覗き込む遥花に、俺の背後に立つ何者かを見やる逢花。
知り合いではない。そう言ってしまいたかった。……しかし、その声、その口調、その雰囲気に、瞬間、思い当たってしまった。
「――――」
悪あがきとは分かっていても、振り返りたくない。喋りたくもない。
「……あのー、ねえ？　いつまで固まってるの？　ヒトが遠路遥々こんな暑い中、わざわざ会いに来てあげたってのにさ。ねえ、ひなたさん？」
「えっ？　そっ、そんなことあたしに言われてもっ」
ひなたの声もする。……全部こいつの手引きか。くそったれ。これだから幼なじみって奴は始末が悪いんだ。いつもいつも、ヒトの家のことに首突っ込んで来やがって。
「ちょっと起陽（たつひ）！　いい加減こっち向きなさいってばっ！　月子（つきこ）ちゃん、困ってるでしょっ！」
分かってるさ。いつまでもこのままでいられる訳がない。いつかは向き合わなけりゃならないなんてこた、2年前から分かってる。
「――っ」
意を決して、振り返る。そこには果たして、予想通りの人物の姿があった。

一人はひなた。俺の天敵にして、にっくき幼なじみ。そして、もう一人は――

「……つ――月……っ……子」

苦虫を噛みつぶす思いで、その名を口にする。

「はぁい♪」

錆色の長い髪をした女が、嬉しそうにニカッっと笑った。

「……だあれ？」

そう、どことなく不安そうな声で訪ねたのは、他でもなく、遥花だ。せがむように、俺のズボンを軽く握っている。

「……私も気になるな。どおゆう関係だ？」

心なしか厳しい眼で、逢花も倣う。

「――……」

俺は答えなかった。こいつが俺にとって何であるのか、対外的には分かり切っている。だが、言葉が出てこなかった。

そんな俺を代弁するつもりだったのか――或いは、単なる嫌がらせだったのか。月子は、大仰に敬礼するような素振りを見せながら、宣言するように、言った。

「臥待（ふしまち）　月子（つきこ）１５歳、北の大地から本日遙々やってまいりました！

境守起陽の――妹でっす！」

【つづく】

《臥待月の輝く夜は》

［1－2］

「へー、たっくん妹いたんだー、知らなかったー、言ってくれれば良かったのにー」

……お気楽に言ってくれる。こちとら、出来れば思い出したくもなかったんだ。

とは言え、まあ。これがこのヒト――優（ゆう）さんが、優さんたる所以なんだろうが。

優さんの病室だった。ベッドに半身を起こす優さんを中心に、五人の人間が室内にいる。俺、ひなた、逢花、遥花――……あと、月子。

「別に、わざわざ言うべき理由もなかったろ。……つーか、珍しく遥花のことほっぽって、どこ行ってたんだ」

それを本気で聞きたいわけではなかったが、できるだけ話を逸らしたくて――眼を逸らしたくて。俺はそんなことを言った。

「んー？　ただの定期検査だよー。でもごめんねー、はるるん、遊んであげられなくてー」

言いながら、優さんは遥花に優しい笑顔を向ける。

当の遥花はと言えば、どこか不安そうな表情で、俺の手を掴んだまま、じっと放さないでいる。……実を言えば、中庭の一件からこっち、ずっとこんな調子だったわけだが。

「……遥花？」

問うと、遥花は変わらず不安げながらも、

「……ううん、ケンサはだいじだって、はるか知ってるもん。……だから、へーきだよ」

そう言って、儚げなながらも、屈託無く笑った。
だから、その場の誰も、それ以上は遥花を問い詰めたりはしなかった。
それよりも、
「で、月子ちゃんだっけ。わざわざ私に会いに来てくれたのー？」
言って、優さんは改めて月子に向き直った。……忘れてくれてればいいのに。

優さんの問いに、一方の月子は満面の笑顔で――
「ええ、そう――恋敵のご尊顔を拝見しに♪」
……そんなことを言いやがった。
「ぶっ！」
思わずおつゆを飛ばした俺を誰が責められようか。
「おっ、おっ、おかしなことを言うんじゃねえっ！」
部屋中から、刺々しかったり冷ややかだったり不安げだったりよく分からなかったりする視線を浴びながら、慌てて拳を振り上げる俺。
だが、月子は涼しい顔で、
「おかしいってどっちが？　わたし？　それとも――優さん？」
そんなことを問うた。
言われている意味が分からない。どっち？　とはどう言うことだ？
――だが、これだけは分かる。おかしなことを言っているのは、間違いなくこいつだ。

「月子！　おかしなこと言ってんのはテメーだろーがっ！　お前と俺はっ――」
……そうだ。月子と俺は。
「俺と、お前は――」
……俺と、月子は。
「……お兄ちゃんと、わたしは？」

試すように、月子は言う。
俺達、は。
……そんなこと、分かり切ってる。
――分かり切ってるのに、言葉が出てこなかった。

「――っ……俺とお前は、確かに血ぃ繋がってねえけど、それでも世間体ってもんがあんだろーが！　冗談でもそう言うことを外で言うんじゃねえっ！」
苦し紛れに、そんなことを言っていた。
月子は失望したように嘆息して、
「……ま、いいけど」
言うと、再び笑顔で優さんに向き直った。

「優さん……て、呼んでもいいかしら？　あなたのことは、ひなたさんから、よーく聞いてマス♪」
不気味なほどに、にこやかな笑顔。
優さんはそれを理解しているのだかないのだか、どこかうきうきとした様子で返す。
「あら♪　なんてなんて？」
月子は殊更にこりと微笑んで、
「それはもちろん――お兄ちゃんをおかしくした張本人として♪」
なんて。……何がもちろんだ何が。

「いったいどうやってこの偏屈者をこんな風に変えたのか、ゼヒお話を伺ってみたいと思っていたのデスヨ♪」
……『おかしくなった』の次は、偏屈扱いデスカ。
俺は釈然としないものを感じていたが――どうやらそれは、俺だけだったらしい。
「それは私も興味があるな」
迷い無く、逢花が言った。

「……あたしも知りたいかも」
どこか悔しそうにしながらも、ひなたが続く。
「デスヨネー♪」
なんて、月子は嬉しそうだ。

「えー？　別に何もしてないよー。確かにたっくん、少しは偏屈なとこもあるかもだけど、根は素直でいい子だよー？」
……優さん、あんたもデスカ。
いや、別に『いい子』でなくて良いのだが、偏屈だなんて、やさぐれた江戸っ子爺さんみたいなつもりもなかったのだ。
「あー、確かに、根はお人好しですね」
「極度のお節介焼きでもあるな」
「嘘つかないし、笑うと可愛いよっ」
……そこは認めちゃうんデスカ。お前ら仲良いな。

つーか、もう分かった。もう十分だ。
――ここは、俺のいるべき場所じゃない。
「……おにいちゃん？」
「……またな、遥花」
不安げにする遥花の頭を軽く撫でてやってから、俺はそっと病室を出た。興味の矛先が変わったからか、俺を呼び止める声はなかった。

女三人寄ればかしましいとはよく言うが、実際堪ったものじゃない。騒々しさよりも、その空気感。外部の者――男を寄せ付けない独特の雰囲気ってもんがある。
女ってな、男にとっては……俺にとっては、未知の生き物だ。つくづく思う。
――女……か。
その言葉には、どこか淫靡で、一種、背徳的な趣がある。

……それは、単なる俺の主観であって、病的な先入観であるのかも知れない。
けど、だからこそ、俺のココロは頑なになる。
――月子と俺は。……俺達は、何なのか。
……それが、言葉にならなかった。

【つづく】

《臥待月の輝く夜は》

［1－3］

食卓と言うものは、元来、家族や親しい誰かと共に囲むべきもんだ。

俺にとって、ほんとの家族と呼べるヒトは一人きりだったが、それでも、それこそ産まれた時から、多くの食卓をあのヒトと共に囲んだ。

それは、今にして思えば、確かな幸福の時間と呼べるものだったかも知れない。

だから、食卓を複数人で囲むことを否定する気持ちはない。『食事は一人で静かに』なんて、クールを勘違いしたようなことを言うつもりもない。

……ない、のだが。

「なに難しい顔してんの？――お兄ちゃん」

差し向かいからふいに言われて、俺は嘆息した。

「……別に」

今更、何かを言う気力も湧かなかった。

……ま、当然こうなる。遠路遙々、親元を離れての一人旅。一応とは言え、こっちでは唯一の身内である俺は、こいつの面倒を見る義務があるわけだ。甚だ不本意だが。

「ほら起陽、いつまでもふて腐れてないの」

言いながら、慣れた手つきで俺の眼の前に茶碗を置くのは、他でもなく、ひなた。差し向かいに陣取る厄介者の代わりに、今日は俺の側面に座を移している――全く要らぬ気遣いとしか言いようがなかったが。

「久しぶりに会って照れ臭いのは分かるけど、も少し愛想良くしな

きゃ」
そんな風に言って、苦笑するひなた。
そんなんじゃねーや、と思ったが、口には出さなかった。不用意なことは言えない。何が火種になるか、分かったもんじゃねえ。
「あはは、愛想の良いお兄ちゃんなんて気持ち悪いだけですよー」
なんて、俺の気も知らず、月子はあっけらかんと言ってくれる。
ひなたは顎へ指を当てて、しばし考えるように黙していたが、
「……確かに、そうかも」
結局は同意して、苦笑した。けっ、無愛想で悪うございましたね。こっちゃ、へらへらしてられる精神状態じゃねえんデスヨ。
「それじゃ、いただきましょうか」
ひなたの合図。倣って手を合わせる月子。
斯くして、もやもやとした俺の気分など軽く無視して、拷問のような食事会は開始された。

思うように食の進まない俺を横目に、ひなたと月子は楽しそうに箸を動かす。
随分と会話も弾んでいるようだった。やれ、あのドラマがどうだとか、この芸能人がどうだとか。かと思えば、こっちは暑いだとか向こうは過ごしやすいだとか、そんなどうでも良い世間話まで。
どれも取り立てて興味の湧く話題ではなかったが、『向こうでは真冬でも外でソフトクリームがデフォ』って話は、ちょっとだけ面白かったかも知れない。北の人間は根性あるな。
でも、一番気になったのは、実はそんなことじゃない。
「――そう言えば、美里（みさと）さん元気？」
ふと、ひなたがそんなことを言った。
「？　お義母さんですか？　元気ですよ？　わりと頻繁に電話してませんでしたっけ？」

少しだけ不思議そうに、月子は小首を傾げる。
「うん、そうなんだけどね。あのヒト、そうゆうの表に出さないヒトだから」
ひなたは少しだけ苦笑して、言った。
「いつも笑顔で、あっけらかんとしてて、子供には涙を見せない。……それがあのヒトの魅力ではあるんだけど。それでもね、これだけ付き合い長いと、辛そうにしてるとことかも見ちゃってるから――心配なの」
そうして、優しく笑うひなた。……ほんと、ヒトの親のことまで、ご苦労なことだ。要らぬお節介だ、と言ってやりたいところだが――……正直、ありがたいとも、思う。今の俺には、素直にあのヒトを案じてやることはできないから。

「へ～……あのお義母さんが辛そうにしてる姿なんて、想像できないなあ。わたしにとっては、いつでもサバサバしてて、遠慮が無くて、でもだからこそ付き合いやすいってゆーか信頼できるってゆーか、そーゆーヒトなんですけど」
不思議顔で言う月子。
ひなたは優しい笑顔のまま、
「んー、ある意味、それで正しいんだけどね。まあ、今は旦那さんがいるし、働いてない分だけ体は楽なのかも」
――そうして、その質問をした。
「お父さんとは、そうゆう話、しないの？」

「――え？」
月子の表情が、瞬間、強ばった気がした。
だが、月子はすぐに笑顔を取り戻すと、
「あ、ううん、お父さんとは――あのヒトは、そう言うことあんまり話さないから」
そう言って、手を振った。

それに、どことなく違和感を感じたのは、俺の気のせいだったのか。
「あ、そうなんだー」
ひなたはそんな風に、何も気にした素振りはない。
……だから、俺も、何も言わなかった。

何かを言うべきだったのかも知れない。何かをすべきだったのかも知れない。
だが、どちらにしろ、どうすれば良いのかなんて俺には分からない。

何も分からなかった――今の俺には、まだ。

【つづく】

《臥待月の輝く夜は》

［1－4］

「やっぱりやーだー」
なんて、玄関先で駄々を捏ねる我が侭娘に言うことを聞かせるにはどうしたら良いですか。全国のお母さんお父さん教えて下さい。
「……ガキかお前は」
嘆息してやると、月子は不満そうに頬をふくらませた。
「なによー、可愛い妹と離れ離れになって寂しくないのーっ？」
「アホか。ひなたンとこ泊まりに行くだけだろーが」
心底うんざりしながら、吐き捨てるように言ってやった。

……まあ、それでも。対外的には、問題ないように映るんだろう。月子が俺の部屋で一夜を明かしても。
月子的には勿論、俺のお袋や、月子の親父的にも、きっと問題ないと思われている。
――だが、こちとら健康な年頃の男子なのだ。血の繋がらない同年代の女子と、同じ部屋で夜を明かすなど堪ったものじゃない。大丈夫だ、問題ない――などと開き直れるわけがあるか。

「つか、初めからそう言う話になってたんだろ？」
月子の向こう側、開け放った扉を押さえる形で待つひなたに問うた。
「あ、うん。……とゆーか、美里さんは起陽のトコでもいいと思ってたみたいなんだけど」
少しだけ困ったように苦笑して、ひなたは頬を掻いた。
やっぱりかあのババア。相変わらず、ヒトを信用してるんだか単に脳天気なんだか分からんが、恐ろしいババアだ。息子の貞操を何

だと思ってやがんだ。……あれ？

「……ま、とにかくよろしく頼むわ。月子も、いい加減観念しやがれ。ほら、とっとと行った行った」

しっし、と追い払うように手を振ってやる。

ひなたはそんな俺に苦笑しながらも、

「うん、それじゃあ、また明日ね」

そう言って、月子の手を引いて行った。

当の月子はと言えば、「にーにーのいけずー」なんて言いながら、最後の最後まで無駄な抵抗をしていた訳だが。……誰が『にーにー』だ、誰が。

「……ったく」

ヒトの声と気配のしなくなった部屋で、独り嘆息する。

脱力するようにベッドに腰掛けて、手にしたのは、滅多に開かない携帯電話。

呼び出す番号もまた、久しぶりだ。もうどれくらい話していないのか……そんなこともはっきりとは思い出せない。お節介焼きの幼馴染みの方が、よっぽど頻繁に話しているってのは、我ながらどうかとは思うんだけどな。

耳慣れない呼び出し音が数回繰り返された後、懐かしい声が耳を打った。

《――さすがにかけてきたわね？》

開口一番のそんな言葉に、思わず力が抜けた。無意識に、緊張していたらしい。

「……相変わらず、意地の悪いこって――……お袋さんよ」

そんな軽口が、口を衝いて出る。ああ、そうか。そう言えば俺は、このヒトの息子だったんだな――なんて、そんな当たり前のことを思っていた。

《あら。こうでもしないと電話一つよこさない親不孝な息子さんより、よっぽどましだと思いますけど？》
……ぐうの音も出ねえ。
反論は諦めて、俺は改めた。
「……悪かったな。それに関しちゃ、釈明のしようもねえよ――けど、今回の悪戯は、ちょっとタチが悪いんじゃねえか？」
《……そうかもね》
そう言ってから、お袋は少しだけ沈黙した。
「？　……どしたよ？」
怪訝に思い問うと、珍しく元気のない声が帰ってきた。
《……悪いわね、迷惑掛けて》
らしくねえな、と思った。
「らしくねえな」
――声に出ていた訳だが。

《あら、分かったような言い方ね？》
どこか、からかうような調子の言葉。
……まあ。確かに、俺の今の言葉の方が、『らしくなかった』のかもしれないが。
今更引っ込みもつかなかったので、俺は続けた。
「あー……その、なんだ。……俺らしくねえことを承知で聞くけどな――……何か、あったのかよ？」
その言葉を吐くのに、いったいどれだけ苦労したかなんて、きっと、屈折した思春期を過ごしてきた俺みたいのにしか分からないことなんだろう。
実の母親でもそれは例外ではないらしく――
《ぷっ》
――なんて、電話の向こうのそのヒトは、俺の言葉に噴き出した。
「笑うなよっ！」

《あっはっはっ！　ごめんごめん、笑うつもりはなかったんだけどっ》
言いながらも、悪びれた様子など見えなかったのは気のせいか。
納得は行かなかったが、ひとまず笑いが治まるのを待って、俺は改めた。
「……で？　ほんとのとこ、どうなんだよ？」
《ん？　ああ、別に、なーんにも》
半ばふて腐れたような俺の声に、お袋はあっけらかんとして答えた。そこに、さっきのような、煮え切らない歯切れの悪さはなかった。
だから、俺もそれ以上は問うことをやめた。……と言うより、それ以上は問いようがなかったのだが。

《こっちより、あんたの方こそ色々あったみたいじゃない？　不良息子が、いっぱしに親の心配までするようになっちゃって》
そんな、からかうような言葉。
俺は一瞬反論しようとして――……結局、口を噤んだ。その言葉は、からかう気持ちなんかよりも、もっと別の何かで溢れていたような気がしたから。
沈黙した俺に、お袋は少しだけ間を置いて、言った。
《……まだ、一緒に暮らす気にはならない？》
俺も、少しだけ間を置いて答えた。
「……二年前、言ったろ？　……その方が、お互い幸せだって」
《……そう》
そう言ったきり、お袋は何も言わなかった。
だから、俺も何も言わなかった。

《……そろそろ、切ろっか》
どれだけ沈黙が続いたか――ふと、そんな声が聞こえた。
《戸締まりには気をつけるのよ？　――それじゃあ……おやすみな

さい、ね？》
「ああ……おやすみ」
《おやすみなさい、起陽》
最後にそう繰り返して、電話は切れた。

ふう、と息を吐く。これだから、しがらみと言う奴は嫌なんだ。こっちの都合なんかお構いなしに、ふとしたきっかけでヒトの心の中を引っかき回しやがる。
――けど。
それだけでもないのかもしれない、とも思う。
名を呼んでくれるヒトがいる。おやすみなさい、と言ってくれるヒトがいる。……それは、もしかしたら幸せなことなのかも知れない。
――誰の声も聞こえない小さな部屋の中で、独り、そんなことを思った。

【つづく】

《臥待月の輝く夜は》

［2－1］

その日の折り紙教室は、いつになく盛況だった。

小児科の子供達とその親御さんは勿論、主に優さんの誘いで集まった他科病棟の有志に、俺を含めた、本来部外者である筈の学生が数人。総勢で二十人弱と言ったところか。

レクリエーションルーム自体はそれなりの広さなので、収容人数的に問題はないが、流石に備え付けのテーブルだけではスペースが足りず、折り畳み式の長机が特設されていたりする。

そんな、いつもよりちょっとだけ賑わう折り紙教室で、あちらの机からこちらのテーブルへ、忙しくパタパタと動き回るのは、他でもなく、神山（かみやま）　美月（みつき）そのヒトだ。教室を始めた当初はぎこちなかった彼女も、なかなかどうして、今では立派な先生ぶりだった。

「変われば変わるもんだなあ……」

なんて呟きが漏れてしまったのも、無理からぬことと容赦して欲しい。

「変わったって……私のこと？」

丁度、俺のすぐ側まで来ていた神山が、驚いたような声を上げた。

「ああ、別に悪い意味じゃねえよ。最初、ひなたに紹介してもらった時は、正直こんな活発に動き回れる奴だとは思えなかったから、さ」

慌ててそう付け足したが、よくよく考えれば、それも失礼な言い草だったかも知れない。

しかし、それに気を悪くした様子もなく、神山はどこか機嫌良く、くすりと笑った。

「やだ、それ、境守くんも同じだよ？」

と。予想外の言葉に、返す言葉が咄嗟には浮かばなかった。

「あっ、もちろんもちろんっ、ひなちゃんみたいに、前の境守くんをよく知っているわけじゃないから、偉そうには言えないんだけどっ……！」

口を噤んだ俺が怒ったとでも思ったのか、神山は慌てた様子で手を振った。

「ああ、いや、別にんなこたいいんだけどよ」

俺もハッとして、咄嗟にそんなことを返したが――正直、腑に落ちないことはあった。

「……俺、そんなに変わったか？」

恐る恐る問うと、神山はどこかあどけないような、素朴な笑顔で言った。

「ちょっと、可愛くなったと思うよ？　前は少し怖かったけど、今の境守くんは――ちょっと好き♪」

なんて。……いや、他意は無いんだろうな、多分。

だが、勘ぐるなと言う方が無理だったんだろう。あいつらにとっては。

「――ちょっと何？　四人目？」

……敢えて声の方に眼をやるつもりはないが。

「え？　四人目？　って――ええっ？　そんな、神山ちゃんに限って、それはないと思うけど～……」

「ほう？　それは、キミが彼女と友人だから、と言うだけの理由か？」

「えっ？」

「あー、甘いですね、ひなたさん。愛の前には友情なんて脆いモノですよ！」

「ええっ？」

「まあ、そこまでは言わないが。しかし、幼馴染みだからと油断し

ていると、鳶に油揚げ、なんてことには、なりかねないな」
「えっ？　えっ？　えっ？」
……。……いや、まあ。深く考えるのはよそう。他愛のない冗談のようなもんだろう、うん。

と、そんな風に嘯いた時だった。
「――それに、もう一人、強力なライバルがいるみたいだしな？」
そんな声と同時に、俺はふと、軽く袖を引かれた。
見れば、そこには見知った女児の姿。
「……おにいちゃん……？　いつもみたいに……して？」
――遥花だった。
控えめに、それでも何かを主張するように、俺の袖を引く。
ふと視線を感じて眼を向けると、少し離れた絨毯敷きの一角に、こちらを見てニコニコしている女性が一人。周囲には他にも数人の女児達がいて、毛糸玉の積まれたカゴなんかも眼に付いた。
ああ、そうか、と瞬間合点がいった。
月子の手前、当たり障りのない立ち位置に自分を置いていたかも知れない。無意識であったとは言え、遥花にしてみれば、それは寂しいことだったのだろう。

「……ああ、ごめんな、遥花」
軽く遥花の頭を撫でてやってから、俺は席を立った。
パッと笑顔になった遥花を伴って向かうのは、他でもなく、ささやかな編み物教室が開かれているその場所だ。
「んふ～♪　いらっしゃーい、たっくん♪」
歓迎してくれるのは結構だが、そのいやらしい笑みはやめてくれないか優さんよ。
「あ、お兄ちゃん！　いらっしゃい！」
そうそう、歓迎するなら、こんな風に屈託なく歓迎して貰いたいもんだ。

最初の一人が声を上げると、他の女児達も口々に俺を歓迎してくれる。毎日のように通い続けたおかげで、もうすっかり顔見知りだ。
「おう、邪魔するぜ」
なんて言いながら、皆が開けてくれたスペースにどっかりと腰を下ろす。その俺の膝上に、待ってましたとばかりに、遥花がすっぽりと身を納めた。
えへへ、と心なしか上気した顔で、嬉しそうに笑う遥花。
――いつもみたいに、とは、つまりこういうことだ。

「はるかちゃんはホントにお兄ちゃんのこと好きだねー」
なんて言う、他の子からのツッコミも当然だが、
「……うん。はるか、おにいちゃんだいすき」
なんて、当の遥花には柳に風、糠に釘だ。何を言われても動じない純真さは、ある意味羨ましいのかも知れない。
「うーん、はるるんは真っ直ぐで良い子だねー♪　……それに比べてたっくんてば、何？　妹さんがいるからって。女の子に寂しい思いなんてさせたらダメなんだからっ！　めっ、だよ、めっ！」
怒られてしまった。俺は子供か。……まあ、言われていることは事実だが。

「……悪かったと思ってるよ。けど……あいつがいると、どうにもやりにくくて、さ」
嘆息気味に言うと、優さんは少しだけ神妙な顔をした。
「……月子ちゃんのこと、嫌いなの？」
距離があるので本人に聞こえることはないと思うが、声を潜めて優さんは言った。
「……嫌いってわけじゃねえよ」
少しだけ思案して、吐き捨てるように言った。
「ただ、その……気まずいっつーかなんつーか……てか、血の繋がりもねえのにべたべたしてくる方がおかしいだろが」

それは、俺にとってはごくごく普通の一般論のつもりだったのだが、優さんは不思議そうな顔をした。
「……そんなものなのかな？　私は――私だったら、たっくんみたいなお兄ちゃんが出来たら、いっぱいいっぱい、甘えたくなっちゃうと思うけどなー」
なんて。

「――――」
……げに恐ろしきは子供と天然か。不意打ち気味な台詞に、俺は思わず口を噤んだ。
「？　どしたの？」
きょとんとした顔を向ける優さん。あどけなさすら感じさせるその顔に――……俺は、ますます何も言えなくなってしまう。
「……何でもねえよ」
そんな風に吐き捨てて、少しだけ熱くなった顔を伏せた。
俺の不可解な態度に、きっと優さんは更に小首を傾げていたことだろう。追求されたら困ると思う反面、そうされても仕方ないとも思っていた。
だが、そうはされなかった。何故なら――
「――あ、いたいた！　境守クン、ちょっといいかな？」
――そんな声が、二人の間に割り込んで来たから。

【つづく】

［2－2］

もう何ヶ月前になるのか。もうはっきりとは覚えていない。そのくらいは前のこと。

すぐ近所じゃない、怖いわね――と、ひなたが言った。食事の手を止めて見てみれば、テレビでは交通事故のニュースが流れていた。

大型トラックと軽自動車の衝突事故。相当に酷い事故だったらしく、軽自動車に乗っていた一家は、ほぼ全員が即死と言うことだった。

――たった一人を除いては。

ニュースキャスターの言うことには、一家の一人娘だけが、一命を取り留めたと言う。俺達と、そう年の変わらない子だったと記憶している。自分と重ねていたのか、ひなたが酷く同情的だったのを覚えている――滑稽なほどに。

あの頃の俺が、どうでもいい他人の生きた死んだに何かを思うことなんてあるわけがなかったから、それは、「ただそんなことがあったのだ」と言う事実の確認以上の意味を持たなかった。

――なのに、皮肉なもんだ。そんな非人間のこの俺に、そのヒトは、彼女を引き合わせようと言うのだから。

「――見える？　フェンスの前で、じっと空を眺めてる子」

車椅子に座した一人の少女を指し示しながら、彼女は言った。

この病院の内科に勤務する看護師の女性で、名は草壁（くさかべ）　幸子（さちこ）と言う。少し前、逢花の一件で知り合ったヒトだった。

「……ふぅん」

屋上への出入り口に張り付くように向こうを伺って、俺はそう、

つまらなそうな声を返す。
「たつ兄、あからさま過ぎ。少しは興味ありそうな声出しなよ」
と、俺の脇から屋上を覗き込んで言うのは、月子である。
「事実興味がないんだから仕方ねえだろ。てか『たつ兄』はやめろ。漬け物漬けるのがすげえ上手そうで嫌だ。……つかそれ以前に、何でお前がここにいんだよ？」
「ふふふ、おにぃが行くところ、月子ありよ」
なんて、気持ちの悪い笑みで言いやがる月子。なんだそのちょっとしたホラーは。

……まあ、ホラーと言えば、屋上で一人佇む車椅子の少女も、十分にホラーなんだけど。夜の病院で出くわしたら、思わず悲鳴を上げてしまうかも知れない。
その車椅子の少女は、遠眼からでも分かるくらい、全身包帯まみれなのだ。おまけに、どこかダークなオーラが漂っている気さえする。
「……正直、関わり合いになりたくねえ」
自分でも気づかないうちに、そんな言葉が嘆息混じりに漏れていた。
「えーっ、ちょっとちょっとお兄ちゃん！　それってちょっと冷たすぎないっ？」
当然と言えば当然の、抗議の声。……だが、こいつから抗議を受けるいわれはない。
「……」
「……お兄ちゃん？」
俺の雰囲気を察したのか、月子は少しだけ静かになった。

仕方ないので、嘆息してから告げた。
「……あのな。お前は知らねえだろうけど、俺ゃあここんとこ、余計なことに巻き込まれちゃあ、その度俺らしくないことしなきゃな

んなくて、正直うんざりしてんだよ。せっかくの夏休みに、これ以上厄介ごと抱えたくねーの。……大体、そんな義理もねえだろ」
そう吐き捨てた俺に、それでも月子は不満そうだった。
「……でも……あんな風に独りでじっと空を見上げて――……寂しそうだよ、すごく」
「……そりゃ、そうだろ」
俺は嘆息した。
「聞いた限りじゃ、他に身よりもねえって話だし。おまけに家族は、自分のすぐ側で死んじまった。なのに、事故の後しばらく意識がなかったから、家族の死に顔すら見ることが出来なかったってんだろ。……自覚も何にもねえ。眼が覚めたら、いきなり家族がもうこの世にいねえって聞かされる――想像できるかよ」
月子は押し黙って、何も答えなかった。

もう一度嘆息して、俺は続けた。
「……それ以上に辛いのは――理解できないのは。……自分だけが生き残っちまったってことだろうな」
その寂しげな瞳が、蒼い空の向こうに何を見ているのか――何を願っているのか。何となく、想像ができた。……なんて、そんな軽々しく言っちゃいけねえんだろうけど。
自嘲的に考えてから、最後に付け足した。
「……だから、な。ちょっとかわいそうだとか、そんな軽い気持ちで関わっていいことじゃねえんだよ。……こっちは前に世話になっときながら、すまねえとは思うけど……さ」
言いながら、伺うように草壁サンの方を見た。
――と。何故か彼女は、満面の笑みを浮かべていた。
「だからこそ、なんだけどね」
そんな言葉。意味が分からず小首を傾げていると、
「……うん。今のお兄ちゃんなら、なんかだいじょぶな気がする」
月子まで、そんなことを言った。

「あ、あのなあ、二人ともあんま無責任なこと言うなよ、俺はっ――」
「キミなら大丈夫だって」
半ば慌てて発した俺の言葉は、そんな呑気な台詞に遮られた。
「一応、カウンセリングの先生は付いてくれてるから、よっぽどのことがない限りフォローは出来るわ。だから、お願い。境守クン――……起陽クンは。何も心配せず、あの子を折り紙教室に誘ってあげて？　もちろん、元気づけてくれるなら、それだけじゃなくてもいいわよ？――信用、してるから、キミのこと」
言うと、彼女はぱちんと一つ、わざとらしくウインクなどして見せた。……まあ、そんなものはどうでもいいのだが。しかし、この自己完結にも近い、有無を言わせぬ強引さは、何だかあのヒトに似ているような気がする。
あのヒトに似ている、と言うことはつまり――
「……分かったよ」
……つまり、逆らえない、と言うことだ。嘆息して、俺は両手を挙げた。

俺の言葉に、草壁サンは嬉しそうに、にんまりと笑う。
「うん♪　それじゃ、後はお願いね。あたしは、いない方がいいと思うから」
そう言って、彼女は俺達に背を向けた。多少無責任かと思わないでもないが……まあ確かに、年の近い人間だけのがいいこともあるだろう。
嘆息しつつも了承して、俺は彼女の背を見送った。
そんな俺に、ふと、月子は言った。
「……ひなたさんに聞いてはいたけど、ホントに変わったんだね」
「あ？」
意味が分からず声を上げたが、

「……ううん、そうでもないのかな。お兄ちゃんがこんなヒトだったから、わたしはここにいるのかも知れないし」
そんな風に自己完結して、俺の問いには答えてくれそうにもなかった。
……まったく、俺の周りの女どもは。どいつもこいつも自己完結しやがって、俺の話なんて聞きゃしねえ。
諦めて、嘆息した。
そうしてそのまま、屋上で独り待つ、車椅子の少女へと足を向ける。月子も、慌てたように俺の後に続いた。

車椅子に座すその後ろ姿に近づくと、重々しい雰囲気がより強くなったような気がした。……迷信を信じる方ではないが、何か得体の知れないモノが体にまとわりついてくるような、そんな錯覚すら覚えてしまう。
きっと、迷っていたら、いつの間にかこの世のモノではなくなってしまうのではないか――そんな馬鹿げた焦りすら感じて、俺は歩み寄るのもそこそこに口を開いた。
「な、なあ、お前――」
だが、
「――私を……迎えにいらしたんですか……死神さん」
そんな台詞に、俺の声は遮られた。

――続けられる言葉なんて、あるわけもなかった。

【つづく】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9476m/

『朱色優陽―アケイロユウヒ―』３

2010年10月23日17時55分発行